



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

復活の主日一日中のミサ (2021年4月4日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 10章 34a、37－43節

第二朗読：使徒パウロのコロサイの教会への手紙 3章 1－4節

(または 使徒パウロのコリントの教会への手紙 5章 6b－8節)

福音朗読：ヨハネによる福音 20章 1－9節

し 死からいのちへ、 やみ ひかり 光へ、 くる 苦しみから よろこ 喜びへ

早咲きの桜は早くも散り始めています。桜を見ていましたら、昔々、歌った合唱曲の一節を思い出しました。

風が、桜の花びらを散らす  
春がそれだけよわまってくる  
ひとひらひとひら舞い落ちるたびに

高田三郎の合唱組曲「心の四季」の第一曲「風が」の歌い出しの部分です。

散りゆく桜の花に、わたしたちは時の移ろいを見いだします。しかし、それは無常観ではない。むなしさではない。むしろそこには、また来年も季節が移ろい来て、桜を見ることができるようというかすかな希望と、ほのかな祈りと願いがあります。

花筏というのでしょうか、小川の川面全体に桜の花びらが浮かんでいる。樹についているときには淡いピンク色なのに、散らされた花びらが集まると、濃い、目も覚める様なピンク色になる。花筏はゆっくりゆっくりと流れていきます。どこに流れていくのでしょうか。それは知らない。ただ、散りゆく桜の花の移ろい、時の移ろい……。ゆっくりゆっくりとした移ろいなのですが、花筏がそれをあらわしているかのようです。

時は移ろう、物事も移ろう、人も移ろう。だからといって寂しいわけではありません。むなしいわけではありません。なぜならそこには、この移ろいをつかさどる方がいらっしゃるからです。

父なる神は、イエスを死者の中から立ち上がらせてくださいました。死からいのちへの移ろいを示す復活の出来事、それを少し難しい表現で主の過越といますが、その出来事は、父なる神のいつくしみの御手の中に生かされているのだということをわたしたちに教えてくれます。死からいのちへ、闇から光へ、悲しみと苦しきから喜びへ、罪からゆるしへ、こだわりから自由へと、父なる神は人を移ろわしてくださるのです。

いのち、光、喜び、ゆるし、自由、これらはすべて復活したイエスに出会った弟子たちが体験したものでした。弟子たちは過越の主とともに、自分たちもいつの間にか、移ろい、過ぎ越していったのです。

イエス・キリストは死者の中から復活しました。この出来事に結ばれたわたしたちもまた、死からいのちへ、闇から光へ、苦しきから喜びへ、罪からゆるしへ、こだわりから自由へと移ろって行くのです。過ぎ越して行くのです。いえ、正確に言えば、移ろわせていただくのです。父と子と聖霊の三位の神によって。

冒頭お話ししました合唱曲は、次の言葉で結ばれています。「人は、見えない時間に吹かかれている」。移ろい行くものの中に、神の働きを見だし、どんな状態になろうとも、神は必ず過ぎ越して移ろわせてくださるのだという信仰を、今年の復活祭の恵みとしていただいてまいりましょう。

